
エヴァとゴジラとエースコンバットを混ぜてみた。

納豆菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァとゴジラとエースコンバットを混ぜてみた。

【Nコード】

N3813Y

【作者名】

納豆菌

【あらすじ】

G対策センターは1995年、対ゴジラ任務を終えた。特殊生物研究機関ゲヒルンに移行されて主にメカゴジラやモゲラなどの技術の平和利用研究をしていたが、2000年セカンドインパクトが発生、

このときに解読された死海文書から想定される使徒に備えるためゲヒルンは独自の軍事力を持った特務機関NERVに改称される。

人類の存亡を賭けた戦いが、今始まる！

この作品は作者、納豆菌が2ちゃんねるの創作発表板で発表していた作品「ゴジラ×エヴァ」の小説家になるう版リメイク作品です。

使徒、襲来 壱

時に2015年

誰もいない道路に一人たたずむ少年がいた。
少年の名を碇シンジという。

さて、少年がどうして誰もいない駅にいるのかという理由があった……

シンジはこれまで叔父の家で暮らしてきた。

叔父の家は第二新東京市の郊外の山の中にあり、シンジは父の兄である叔父のことを「先生」とよんできた。

先生は寡黙な人だったが、シンジにいろんなことを教えてくれた師匠のような人だった。

そんな先生のもとにはシンジが4歳のときに来た。

NERVとかいう組織で働く両親が忙しく、なかなかシンジのことを構えないためだった。

しかし両親が育児放棄などしたわけではなく、クリスマスや正月など休みが取れるときはできるだけ来てくれてシンジは両親と叔父の愛情を受けながら成長してきた。

こうして叔父の家で逞しく成長してきたシンジだったのだが、ある日父から電話が来た。

どうやら第三新東京市まで来てほしい。部下の人を駅までやるからリニアに乗って明日、至急来てほしい。

という内容だった。

叔父に話すと「せっかく親と過ごせるなら行って来い」と二つ返

事で許可がでて、ここまでやってきたと言っわけだ。

『現在、特別非常事態宣言が発令中です。至急、民間人の皆様は近くのシェルターに避難してください。・・・』

駅のスピーカーからは大音量で非常事態を伝える放送が無人の街に鳴り響いていた。

「おそいなあ、ここのはずなんだけど・・・」

そんな状態にかかわらず少年、碇シンジは来るであろう父の部下を待っていた。

バーン！！ドカーン！！

激しい音が地響きとともにシンジの立つばしょへ聞こえてきた。

「なんだ！？戦争でもしてんのか？」

さすがにこれにはシンジ少年も驚いて音のなったほうへ目を向けた。

するとシンジの目に山の間から姿を見せる巨大な緑の怪物の姿が飛び込んできた。

NERV本部、発令所

軍艦のブリッジを意識して設計されたであろうこの発令所には巨大なモニターがある。

その巨大モニターを見ながらUN（国連）軍の将校たちが指揮を執っていた。

「なに？全くダメージが与えられないだど？」

将校の一人がぼやいた。

「現在、敵生体は旧箱根湯本に侵攻！UN部隊の半数が撃墜されています！！」

彼らの下にいるオペレーターが現状を報告する。

モニターに映っている怪物は次々に近くを飛ぶV T O L機を撃墜していく。

「おのれ〜!!」

そして先ほどの将校の隣の将校が怒りのこもった声でいうと手に取った電話に指示を出していく。

「航空自衛隊に支援要請をだせ! 近くの基地から全機上げろ! こうなったら総力戦だ!!」

「いや、今の指示は撤回だ!」

もう一人の将校が電話を取り上げて、言った。

「黒井! 何をする!」

電話を取られた将校は憤慨しているが黒井と呼ばれた男は子供を諭すように言葉を告げた。

「いまここで航空隊に増援を出しても無意味な被害を出すだけだ。だからアレを使う。」

「まつまさかN2爆雷!? 街中ですか?」

「そうだ、旧熱海はもう住民の退避も完了している。世界と街ひとつ、どっちを優先するかはわかるよな?」

「えーい! わかった!」

将校の男は電話をもう一度とると指示をだした。

「N2はどれくらいで準備できる?」

『10分でできます!』

電話の向こうで男が答えている。

「よし! できるだけ早く投下するんだ! 必ず奴を消し去れ!」

『はい! 了解しました!』

電話の向こうの男が答えて電話は切れた・

できるだけ続けるつもりです

使徒、襲来 壱（後書き）

あとがき

はじめまして、納豆菌です。受験勉強しながら書いてます。

自分はエヴァとゴジラが好きでネットで小説探してたんですがないので自分で作ろうと思い、作ってみました。

2ちゃんねるの創作発表板で書いてるんですが、文が短かったりしてるので書き直そうと思い、これはいわばリメイク版です。

下手な文章ですがどうか応援よろしくお願いします

使徒、襲来 貳

シンジは使徒とUN部隊の戦いを見ていたのだが、突如後ろからものすごい爆音が聞こえてきたので振り返った。

振り返るとシンジをめがけて猛スピードで一台の車が走ってきていた。

そのまま車はシンジの横に急ブレーキで止まり中から20代後半と思われる女性が声をかけてきた。

「あなたが碇シンジ君ね！」

シンジを発見したことで喜ぶ彼女はそのままシンジの腕をつかんで強引に車に乗せてしまう。

そしてエンジンがうなり声をあげ、急加速しながら二人を乗せた車は走り去っていった。

シンジは車の助手席に座っていた。

どうやら自分は気絶していたらしい。

隣の運転席に先ほどの女性が座っていた。

「あら、シンジ君。目、覚めた？」

「はい。それよりあなたは誰ですか？父の言っていた部下の人ですか？」

シンジは当然の疑問を口にした。

するとミサトが答えた。

「わたしはあなたのお母さんの部下の葛城ミサトよ。お母さんは忙しいから代わりに来たの。」

「よろしく願います。」

そこでシンジはもうひとつ疑問があった。

「ところでこれからどこに？避難しなくていいんですか？」

「ああ…それなら、」

ミサトは何かを言おうとして黙り込んだ。

そして運転しながら何か考えようと右上見ていたが途端に叫んだ。
「あれ？おかしいわね…なんでUNは撤退なんか…って奴らは！！
マズイ！！シンジ君！伏せて！！」

シンジが言われた通りに伏せた瞬間ものすごい爆風がやってきた。

爆風のせいで二人の乗った車は10mほど吹っ飛ばされていた。

車の窓は割れて車体はボコボコになっている…

「ああ、私の車、残りのローン…」

ミサトがシンジの横で嘆いていた…

発令所…

「やった！！これで奴も終わりだ！！」

「N2の威力に掛かればあんな奴なんてちよちよいのちよいだ！！」
司令席では将校の二人が勝利宣言をしていた。

そんな同僚の姿を見ながら黒井は呟いた。

「N2が効くような奴ならとっくに倒していたが…」

司令席の上にもうひとつ席があった。

そこに顎鬚にグラサンという異様な格好の司令、碇ゲンドウが座っていた。

「ふん、あんなものが使徒に効くのならとっくに倒せていたものだが…」

「あの程度ではATフィールドは破れんよ…」

そういうのは副指令の冬月コウゾウである。冷たい印象を与えるゲンドウとは対照的に暖かい印象を持ち、実質NERVではゲンドウより冬月のほうが人望を集めている。

『偵察機が爆心地付近に到着！映像を出します！』

オペレーターが叫び、メインモニターに爆心地の映像がでる。

爆心地付近には熱海の旧市街地があったのだが爆発で荒野と化し

ている。

その中央に緑の巨人が立っていた…

「なんだとう!?!」

「馬鹿な…もう一度…」そこまでだ!」

将校の口を防いだのは黒井だ。

「もうN2はあれには効かないことが分かった。我々には何もできない。NERVに指揮権を委譲するぞ」

「待て黒井!」

「もう無駄だ。我々には何もできん。」

黒井は喚く同僚を黙らせて宣言した。

「我々自衛隊、ならびにUN共同部隊は本時刻を持って指揮権をNERVに委譲する!!」

そして上にいるゲンドウに告げた。

「碇、期待してるぞ。」

「ああ、そのためのNERVだ…」

ゲンドウの言葉と共に黒井達UNの将校達は退席していった。

シンジたちはなんとか車を直した。

「ところでシンジ君。さっきのことなんだけど…」

車を運転しながらミサトが話し始めた。

「あなたにはこれからNERVに行つて貰うわ。」

「えっ…両親が働いてるところですよね。」

「そうよ。お母さんも待っているわ。」

「そうですか、母が…」

「そうそう、あなたのお母さんはわたしの上司ってさっき言ったけどあなたのお母さんは作戦部の部長なのよ。」

「えっ、母さんが部長?」

「そうよ、お父さんは総司令!」

「総司令!?!っていつかNERVってどんな組織なんですか!?!」

「人類を守るための組織!?!ってところよ。」

「父さんが人類を守る組織の総司令・・・どう見ても悪人面してんのに・・・」

「プツ・・・シンジ君、ここからNERVに入るわ。」

車の前にはトンネルがあった。

中に入ると明るく、車を載せる台のようなものがあり車が載ると動き始めた。

そして二人の乗った車はゆっくりと地下へ沈んでいった。

使徒、襲来 参

シンジを乗せた車はどんどん地下深くに降りていった。

「ミサトさん、どこまで降りるんですか？」

「待って。もう少しで見えてくるはずだから。」

すると車が薄暗いトンネルを抜けて視界が一気に開けた。

「す、すごい…」

目の前には美しい光景が広がっていた。

湖があり、森があり、柔らかな日差しまである。

「ミサトさん、ここって本当に地下ですよね？」

「そうよ。第三新東京市の地下に建設された地下要塞、人類の科学力の粋を集めて造られ、人類再建

の要となる場所…そして私たちの基地、ジオフロントよ。」

「これがジオフロント…すごい。」

そうやってシンジが感動してるといつの間にかリフトに乗せられた車は目的地に到着していた。

「シンジくん、先に降りてて。」

「はい。」

一人先に降りたシンジは駐車場らしき場所の出口にいた。

そこに二人の女性が近づいてきた。

「あつ、母さん！ナオコおばさんも！」

二人を見つけたシンジは声をあげた。

「久しぶりね、シンジ。」

「大きくなったわね、シンジ君。」

二人とはシンジの母親、碇シンジとその先輩兼ライバル兼親友の赤城ナオコである。」

シンジは小さいときに赤城家によく預けられていたので知っている。

「すみません、遅れてしまつて。」

いつの間にかミサトが車から降りてきていた。

「ミーちゃん、お疲れ様。あら？服がボロボロ…」

「いえっ！なんでもありません！！」

「なんだか怪しいわね、車もボロボロだし…もしかしてくる途中に事故つたの？（怒）」

明らかに不吉なオーラを出しているユイの問いにミサトは答えられない。

まさか携帯に入っていたN2の投下を伝えるメールを気づかなかつたとメールを送つてきた本人に言うことはできない。

しかも車に乗せていたのはその人の一人息子でもあり一歩間違えれば死ぬ危険にあわせたともいえない。

ミサトは賭けに出た。

「シンジくん、事故つてなんかいないわよね？」

かなり怖い顔で言うがシンジにはその意味が分からず、

「ええ、事故にはあわなかつたけど…」

などと答えた。ミサト大ピンチ。

「それで？ミーちゃんの車がボロボロなのはなぜ？事故にあわなかつたけどどうなつたの？」

ユイがシンジを詰問するとシンジは

「なんか原爆みたいなの爆発に巻き込まれたよ。でも怪我とかなくてよかつた…」

全て白状した。

瞬間、ユイの顔が鬼のように変わる。

「ミーちゃん？後で執務室に来てね？」

ユイは顔こそ笑っているが眼が笑っていないかつた。

そこにナオコが口を挟んだ。

「ユイ？いい加減に行きましょう。時間はないのよ。」

「そうね…」

そう答えたユイの顔は苦しそうな表情かつた。

「第7ゲージ」

そう書かれた扉を一行は通り過ぎた。

ゲージの中は真つ暗だった。

「今、電気をつけるわ。」

ナオコがそういつてから3秒ほどして、突然シンジの目の前に紫色の顔が浮かび出た。

「うわっ!!か、かお!?!」

目の前にはロボットのようなものが首から下を水のような液体に浸かっている。

「こ、これは一体?」

「私が作ったの。」

ユイが言った。

「はっ?」

「これは人型汎用決戦兵器エヴァンゲリオン。その初号機よ。」

「人型…汎用決戦兵器!?!」

「そつよ…」

そこでユイはいったん視線を下に降ろしてまた上にあげて続けた。

「シンジ、あなたにこれに乗って上で暴れてる使徒を倒してほしいの…」

「えっ?なんで僕?ほかにパイロットとかいないの?」

「エヴァンゲリオンは特殊能力をもった人間にしか乗れないの。そしてつい先日、あなたにその能力があると判明したの。」

シンジには理解できなかった。

自分の脳の処理能力では現実を処理なんかできなかった。

「シンジ、久しぶりだな!!」

シンジが心のなかで葛藤していると突然上から声がした。

聞き覚えのある声に上をむくとそこにはやくざみたいな顔をした父、碇ゲンドウが立っていた。

初号機、出撃 壱（前書き）

時に2015年、一人の少年が第三新東京市へやってきた。彼の名は碓シンジ、特務機関NERVで働く両親に呼び出されてきたのだが、NERVに着くと彼はある決断を迫られた。果たして彼が出した答えとは？

初号機、出撃 壱

シンジは上を見上げた…

頭上には室内なのにグラサンをかけた顎鬚がこちらを見下ろしていた。

それはまさしくシンジの父親、碓ゲンドウだった。

『シンジ、急な話だが…そこにあるエヴァにのってくれ。』

ケージの中にマイクを通して言動の低音ボイスが響き渡った。

「そんな、父さん！僕には無理だよ！！」

するとゲンドウが答えた。

『頼む、シンジ。お前しかいないのだ。』

「でも僕のほかにもパイロットはいるんじゃないの？」

シンジは希望をこめてその質問をした。

すると、その問いにはユイが答えた。

「シンジ、パイロットは他に二人いるわ。」

「なんだ…その人たちなら…」

そのシンジの言葉をユイがさえぎる。

「いいえ。二人のうち一人はドイツにいてここにいるもう一人…綾波レイって言うんだけど…彼女は 今、大怪我をしてとても戦える状況じゃないの…シンジが乗らないって言ったら最悪その子を使うしかないわ。」

「そんな…怪我してんのに？」

「それしか方法がないの…」

「じゃあ分かったよ母さん…父さん！僕が乗るよ！！」

するとゲンドウが返事をした。

「すまない、シンジ…お前にこんなものを背負わせてしまって…私は親失格だな…」

「そんなことないよ！！父さんたちはこれしか方法がないんだろ！！それにこれは僕がきめたことなんだ！！父さんが謝る必要なん

てないよ！」

一連の会話が終わり、ナオコに似たミサトくらいの年齢の人が出てきた。

「こっちへ来て、シンジ君。説明するわ。私は赤城リツコよ、よろしく。」

シンジはリツコに連れられてケージが見下ろせる部屋にきていた。部屋のなかにはたくさん機械とモニターが設置され、たくさんのスタッフっぽい人たちが機械を操作している。

「シンジ君、時間がないから手短かに説明するわ。これはインターフェイス・ヘッドセット。エヴァとのシンク口に必要なものよ。」
そういったリツコの手には白いカチューシャみたいなものがあった。

「これがエントリープラグよ。今からシンジ君はこれに乗ってエヴァを操縦することになるわ。」

リツコの指差したほうには白い筒のような大きい箱があった。

シンジがエントリープラグに入ると起動作業が始まった。

『エヴァンゲリオン、起動作業開始』

『ゲージ内から総員退避完了』

『冷却水、排水』

オペレーターがそう言うとゲージの中の水が抜かれてエヴァの全身が現れた。

『第一次接続、接続準備完了！』

『つづいて第一次接続作業開始』

『停止信号プラグ排出』

初号機の首の後ろあたりが開いて脊髄からエントリープラグに似たプラグが出てきた。

『エントリープラグ挿入作業開始』

先ほどの停止信号プラグと入れ替わるようにエントリープラグが入っていく。

『初号機発進位置にスタンバイ』

そういうと初号機が動いて発射用リフトの上に乗った。

『第一次接続完了、第二次接続開始』

『シンクロスタート!』

発令所ではナオコとリッコが驚愕していた。

「サードチルドレン、シンクロ率、20...30...40...50...60...70...80...87%で安定!」

童顔のオペレーター、伊吹マヤが伝える。

「そんな!?!ありえない!」

リッコが叫ぶ。一方ナオコは不気味な笑みを浮かべていた。

そして一言、

「いける...」

ナオコだけでなく発令所のほとんどが同じことを感じていた。

「第二次接続、完了しました!」

メガネのオールバックオペレーター日向マコトが叫ぶ。

「ではユイさん、指示を...」

ミサトがユイに促した。

「あなた...」

ユイが指令席のゲンドウに確認をとる。

「ああ...使徒を倒さねば我々に未来はない...」

両手を顔の前で組むゲンドウポーズのままゲンドウが言った。

「では、エヴァンゲリオン発進!」

ユイの指示と同時に初号機が地上に打ち出された...

初号機、出撃 吉（後書き）

いや〜更新おそくてすいません。

受験勉強たいへんで…

まあ受験なんかには負けないよう精一杯頑張ります!!!

あと、感想とかもよろしくおねがいします!!!

初号機、出撃 式

『エヴァンゲリオン、発進!!』

通信からユイの声が聞こえてきた。

すると想像してたよりも何倍も強いGが身体にかかった。

「ちよっ…こんな…聞いてない…」

シンジが思わず弱音を吐いた。

『我慢しろ…お前は男だろ!』

ゲンドウが言ってくる。

「（じゃあ父さんが乗ってよ!!）」

シンジは心の中で悪態をついた。

その瞬間身体に掛かっていた重力が消え、代わりにものすごい浮遊感を感じる。

「うわっ!!」

『大丈夫よ、シンジ君。無事にエヴァは地上に出たわ。』

今度はリツコだ。

『ではシンジ君、まず歩くことを考えて。エヴァは思ったとおりに動くわ。』

リツコの言葉通り歩くことを考える。

全神経を集中させて考える。

すると何かの気配を感じた。

外からの気配ではない…エヴァの中からである。

「母さん、エヴァって生きてるの?」

シンジが疑問を投げかけた。

すると返事がきた。

「シンジ、あとで話をきかせて…とりあえず今は歩いて。」

またあるくことを考えた。

するとエヴァが歩きはじめた。

ズシン……

そんな轟音を立ててエヴァは歩き始めた。

通信の向こうの発令所内では歓声があがっている。

そして歩くうちにビル陰から昼間見た使徒が見えた。

「母さん、これを倒せばいいんだね？」

『ええ、シンジ武器はまだないから素手で倒すしかないわ…がんばって。』

「分かった。」

初号機の扱いにも慣れてきたシンジは跳躍して使徒に飛び蹴りをくらわせた。

使徒が吹き飛ばされる。

「まさか！あんな動きができるなんて…」

「初搭乗であれだけのうごき…まさしく天才ね…」

発令所で赤城親子はモニターを食い入るように見つめている。

『シンクロ率、瞬間的に98パーセントまで上昇！！』

「まさに奇跡ね…」

ミサトも言っている。

0・000000009%の確立でしか動かないとされた初号機を自由自在に操るシンジはまさに奇跡といってよかった。

だがここで問題が発生した。

起き上がった使徒が光の槍を飛ばしてきたのだ。

初号機はかるうじてよけたがアンビリカブルケーブルが切れたのだ。

「アンビリカブルケーブル破損！！」

マヤが叫んだ。

「ユイ、どうするの！？」

ナオコがユイに指示をうながした。

「シンジ、そこから200M後方にアンビリカブルケーブルの接続ポイントがあるわ。」

ユイが指示するが初号機から返事はない…

そしてそのまま動かない初号機は使徒に頭をつかまれてしまった。

シンジは光の槍が飛んできた瞬間、死を意識した。

とび蹴りをしたときは一種の興奮状態にあっただが冷静になつて改めて死を意識したのだ。

そしてシンジは恐怖から動けなくなっていた。

使徒に頭をつかまれてもどうすることもできずに頭をやりで打ち抜かれて飛ばされてしまった。

ビルに激突した初号機を何度も使徒は攻撃し続ける。

エントリープラグの中で死の恐怖におびえるシンジの耳には何も聞こえなかった。

不意に、初号機の中の存在が大きくなっていることに気づいた。

暖かいもので自分を包んでくれている。

シンジはその存在に身をゆだねた…

「初号機、頭部ユニット破損！！現在機体損傷率18%！！」

マヤが報告する。

「パイロット生死不明！通信設備が損傷し初号機との通信不能です！」

そしてロン毛のオペレーター、青葉シゲルが報告した。

「しかたないわね、初号機確保を……………」

そこまでユイが言いかけたとき、不意に初号機が再起動した。

「なに！？」

「暴走ではありません！パイロットの意志で動いています。」

シゲルの報告。

「まさか！初号機が覚醒してるとでもいうの！？」

ユイが言う。

「覚醒！？」

ミサトが言う。

「ええ、エヴァは最初に現れた使徒『アダム』のコピーよ。それを人間にコントロールできるよう魂を封印して…まあシンクローのために少し残しているんだけど…力を抑えているの。」

「つまり？」

「覚醒してしまうとエヴァは人間には抑えられなくなるわ、パイロット以外にはね…」

「ということはシンジ君しか止められない…ということですね。」

「でもそれはS2機関、あなたのお父さんの研究してたものがある場合よ。おそらくエネルギー切れになるわ。ほんとはエヴァを本当に使いこなせるようになってから封印を解きたかったんだけど…」

覚醒した初号機は圧倒的だった。

使徒が止めをさそうと飛ばしてきた槍をATフィールドで防ぎ、自分でATフィールドを固めて槍を創るとその槍で使徒を突き刺してしまう。

コアを貫かれた使徒はそのまま倒れ、活動限界を迎えた初号機も停止した。

NERV、入隊 壱（前書き）

シンジはエヴァに乗ることを選択した。だが、戦闘中にシンジは死への恐怖から動けなくなってしまう。

だがそこで初号機が覚醒、シンジはかろうじて使徒の殲滅に成功した…

NERV、入隊 壱

南極海

かつてセカンドインパクトの起こったこの地にはいまはもう以前のような氷に包まれた幻想的な景色はなくなり、代わりに天に向かってそびえる塩の柱と血のような赤い色の海が広がる地獄へと化していた。

そんな死の海に突如、巨大な水柱が立ち上がる。

そしてその水柱が消え去った後、海面から半身を現した黒い獣が天へ咆哮をあげた。

その声は死の海に響き渡った…

「知らない天井だ…」

シンジは見知らぬ部屋にいた。

やがてここが病室であることがわかると昨日のことを思い出した。確か両親に呼ばれてきてみたらエヴァンゲリオンとかいうのに乗せられて使徒とかいうやつと戦い倒したんだった。

そこで記憶は途絶えていた。

誰かが病室に入ってきた。

母、碇ユイである。

「あら、シンジ。目は覚めた？」

ユイが尋ねてきた。

「うん。」

「じゃあ先生呼んでくるから。あなた三日間も眠っていたのよ。」
そう言っユイは病室を出て行った。

自分が三日間も寝ていた。ということに驚いた。

やがて医者ユイが連れてきて簡単な診察をされた。

「問題ありません。今日中に退院してもOKですよ。」
白髪交じりの初老の医者はそういつて戻っていった。
「シンジ、ちょっと今からいいかしら？」
ユイが聞いてきた。
「いいけどどこに？」
「父さんのところよ。契約とかいろいろあるから……」
「契約？」
「詳しいことは後で話すわ。それじゃ行きましょー！」
シンジはユイに連れられ司令室に向かった。

司令室はバカみたいに広い部屋だった。
なにやら訳の分からない記号が描かれていて、これも父さんの趣味か…とシンジは思った。

「久しぶりだねシンジ君。大きくなったね。」
冬月が話しかけてきた。

「お久しぶりです、先生！」
シンジも挨拶を返す。

冬月はシンジが小さいころから知っていた。
シンジも冬月になつていて冬月はシンジのことを孫のように思っていた。

「久しぶりだなシンジ。」
続いてゲンドウがいつものポーズを崩さずに話しかけてきた。

「こうやって直に話すのは久しぶりだね。」
こうして挨拶がすんだところで冬月が話題を変える。

「ところで早速だが、シンジ君。きみにエヴァンゲリオン初号機専属パイロットになってもらいた い。いいかね？」

「あなたが自由に決めていいのよ。」
ユイが耳元でシンジにささやいた。

だがシンジの心は決まっていた。
「はい、ぼくで良ければ喜んで。」

「えっ？」

ユイが驚く。

「ごめん母さん。でもできれば人の役に立てるのならそうしたいんだ。」

シンジの言葉には熱意がこもっていた。

「まああなたがそうしたいのならいいわ。ただし途中で辞めたりはできないわよ！」

「分かってるよ。」

シンジの迫力に負けてユイも認めざるを得なかった。

その後、契約金の話や保安部について、訓練について、その他もろもろを話し合い、2時間も司令室にいた。

最後に住居の話になった。

「シンジ、家はどこにするの？できれば私たちは一緒に住みたいんだけど……」

「ああ、父さんたちと一緒にすむよ。」

「でもね私たちそんなに帰れないかもしれないし……」

「大丈夫だよ。いままで伊達に自炊してきたわけじゃないし。」

シンジは叔父の家では自炊で生活してきた。

叔父が自分のことくらい自分でしろ！という教育方針だったので小さいときからやらされていた。

おかげで料理の腕はかなり高い。

「まあ一応のときはミーちゃんに預けるわ。」

こうしてシンジの住居が決定した。

NERV、入隊 壱（後書き）

なんか切りが悪いんですが今日はここまでということにしてきます！

NERV、入隊 式

司令室を出たユイとシンジの二人をナオコが待っていた。

「シンジくん、ちょっと来てくれるかしら。このまえの戦闘について聞きたいの。それと顔見せとか もするから…まずは私の研究所にきて。」

言い方こそ丁寧だがこのときのナオコの表情を見て拒否できるものなどいない。

実質的な強制である。

シンジは助けを求めるようにユイのほうを見たがユイはこの状態のナオコは止めても無駄だと知っているのでシンジのほうに手をあわせてそのままどこかへと逃げ去った。

そしてシンジはナオコの無言の圧力で研究所まで連行された。

研究所の中は薄暗く、棚には英語やドイツ語で書かれた研究書や報告書があり、怪しげな薬の入ったビンまである。

ナオコはどこかへ電話をかけた。

「ああリツちゃん、捕獲したわ。早く来てね！あなたが来たらはじめるから準備しとくわ！！」

やけにうれしそうに話すナオコを見ながらシンジは怯えていた。

「（準備！？一体これからなにが始まるんだ？）」

三分後何かのビンを持ったリツコが研究室のドアを勢いよく開けて入ってきた。

手に持ったビンには「自白剤（試作品、取扱注意！！）」と書かれている。

身の危険を感じたシンジは正直に全てを話した。（隠すつもりなど無かったが）

一連の話を聞き終わった赤城親子は全く同じ反応を見せた。

「初号機の魂が出てきた…覚醒したのね。」

リツコがそういい、

「でもシンジくんが初号機を支配下においていた…」

ナオコが考察する。

「つまり初号機がシンジくんを認めた…いや、シンジ君が受け入れた…！」

二人同時に言って上機嫌になった。

そしてふたりは次の質問に移った。

「そんなやり取りが3時間続けられ、時計は4時を回っていた。」

「シンジくん、オネエサンがむかえにきたわよ〜」

能天気なミサトがユイに頼まれてシンジを迎えに来たとき、シンジはグツタリとなっていた。

その後復活したシンジはNERVスタッフとの顔合わせをしていた。

「サードチルドレンの碇シンジです。よろしくお願ひします。」

「ああよろしく。僕は日向マコトだよ。オペレーターをしてる。」

「俺は同じくオペレーターの青葉シゲルだよ。よろしく！」

「私も同じくオペレーターの伊吹マヤです。よろしくね、シンジ君。」

そんな感じで顔合わせは進んだ。

「最後にもう一人会わせたい子がいるんだけど…」

オペレーターとの顔合わせが終わってユイが言ってきた。

「実はこの前言ったパイロットの一人よ。怪我してて乗れなかった方。か〜わいい女の子よ…！」

急に真面目な口調でしゃべっていたユイがおちゃらけた喋り方に変わったのでツボにはまってしまった。

「あ〜らシンちゃん、かわいい女の子が気になるの？」

ミサトが冷やかしをいれてくる。

「ちつちがいますよ！それになんですか！？シンちゃんって！？」
シンジは赤い顔で否定する。

やはりシンジは多くのSSで書いてあるとおりこの作品でもウブな少年のようだ。

「（からかいがあるわね、この子…）」

ミサトは心の中で次なる悪戯を考えついた。

「ユイさん、私が連れて行きます。」

ミサトは急にそう宣言した。

ミサトの表情をみて何をしたいか分かったユイはしばらく考えたあと、

「それじゃ、お願いするわ。この子そこらへん鈍いから苦労するわよ。」

というアドバイスでした。

やがてミサトとシンジは発令所を出て行った。

「さうて、青葉君！病室とここから病室までの廊下の監視カメラをだして！」

「はい！ー！」

急に発令所が活気づいてきた。

「MAGIによる算出の結果、目標の病室までの到達予想時刻は16：54！3分後です！！」

こういうことが大好きなマヤは本気だ。

たまにユイが行うこうしたイベントは職員にリラックスさせて志気を高めるといった効果をもっている。

「いや、それにしても司令の1日観察は面白かったですよね。」

司令の1日観察とは碇ゲンドウを1日中観察したイベントだ。

風呂の中もトイレの中もすべて監視していた。

もちろん本人はそのことを知らない。

副指令の冬月は知っているが彼自身進んでこの作戦に参加してい

たので情報漏れの心配はない。

さて、メインモニターに映し出された病室内部の映像にシンジが現れた。

ミサトは直前にトイレに行くとか言って離脱している。

「やあ、君もエヴァのパイロットなんだね？」

シンジが話しかけた。

「あなた誰？」

ファーストチルドレン、綾波レイがベッドに寝た状態のまま答える。

しばらくシンジは固まっていたが復活して答えた。

「あ、ああ、ぼ、ぼくは、さ、サードチルドレンの、い、いかり、し、シンジ、です。」

見ていた発令所が爆笑に包まれる。

人間は気分が高揚していると不思議と全てが面白く感じられる、あの状態だ。

さて、レイがどう答えたか…

「そう・・・」

シンジがまたフリーズする。

病室の中にはしばらく重い雰囲気があった。

「あの、君は名前なんていうの？」

シンジが意を決して質問する。

「名前を聞いてどうするの？」

またフリーズ…

発令所ではシンジがフリーズするたんびに大爆笑が起こっていた。
「パイロット同士仲良くなるためにも名前くらいお互いに知っておきたいじゃん。」

シンジが口を開いた。

「仲良く…必要ないわ。」

「えっ!?!」

「私は要らない存在だもの…」

どうやらレイはエヴァを動かせるパイロットが来た時点で自分は必要ないと判断したらしい。

実際レイはエヴァの起動実験に失敗している。

しかしそんなレイの言葉を聞いてシンジの顔がけわしくなった。

「自分が必要ないだなんて、そんな悲しいこと言うなよ。」

なおこの言葉は発令所に大音量で流されています。

「誰からも必要とされないなんてそんなことあるわけ無いじゃないか。」

「けれどエヴァをうごかせるあなたが来た。動かせない私は不必要

…」

「エヴァが動かせようと動かせまいとそんなこと関係ないじゃないか！誰か一人でも必要としてくれる人がいるなら存在価値なんてそこにあるんじゃないの？会ったばかりの僕が言える事じゃないけど君はエヴァ以外でも生きていけるんじゃないか？」

「どうしてそんなこと言うの？私は誰からも必要とされない…」

「そんなことない！絶対に誰かが君の事を必要としているよ！…僕が君を必要とするよ。だから友達になるためにまず、名前をおしえてくれないかな？」

そこでシンジは微笑んだ。

もともと中性的な顔立ちのシンジは笑顔が非常に似合いその顔は天使の微笑みだった。

それを至近距離でうけたレイは顔を赤らめた。

もちろんこの会話も画像つきで発令所に生中継されている…

モニター越しにその微笑をうけた女性職員は心を打ちぬかれ実の母親ユイも一瞬ときめいてしまった。

顔を赤らめたレイにシンジは声をかける。

「どうしたの？熱でもあるの？」

「いや、なんでもないわ」／／／

「私は綾波レイ。ファーストチルドレン。」

立ち直ったレイは自己紹介かなりシンプルなをした。

「んじゃ綾波って呼ぶね。よろしく、綾波!」

そういつてレイにさっきの4倍ほど威力のある微笑みをする。

レイは顔を赤らめてそのまま気絶した。

「あれ?綾波、寝ちゃったのかな?」

自分でやっておきながらそりやないだろ…という発令所一同の思
いも届かず、レイが寝てしまったと思つたシンジは病室を後にした。

発令所では大半の女性職員と一部の男性職員おいおい…がいまだに胸をとき
めかせていた…

NERV、入隊 弐（後書き）

なんかシンジがかっこよすぎる気もするんですが自分はシンジが心を壊していくとかそんなの嫌なんでできるだけそついうの無しでいきたいです。

NERV、入隊 参

「やはり使徒は再来したか・・・まあ我々の投資が無駄にならなかつた点では評価したい・・・」

「しかし君の組織の出した損害、その被害金額、一体いくら出したら気がすむんだ？」

「我々も予算の抽出は面倒なんだ・・・」

暗い部屋の中に5人の男たちの姿が浮かび上がってきた。

その男たちの見る先にはこの暗い中にもいつものポーズを崩さずにグラサンをかけつつづけている男

、碓ゲンドウがいた。

「しかし敗北はすなわち人類の破滅を意味している。我々には手段など選ぶ余裕などないのだ。」

沈黙を維持していたゲンドウが言った。

すると中央にいたバイザーをかけた男がそれに答えるように口を開いた。

「まあ君の言いたいことは分かった。予算の件は一考しよう。碓、君には使徒殲滅だけを頑張っても raithai・・・期待しているよ・・・」

男が言い終わると一斉に彼らの姿が消えた。

あっさりとは会議は終わり、部屋に残っているのはゲンドウだけになつていた。

「しかし、ゼーレ・・・その目的、人類補完計画とそれに賛同する組織“ウロボロス”・・・一体なんだと いうのだ？」

ぼつりと誰もいない部屋に呟いた。

シンジはユイの車で初めての帰宅をしていた。

「ねえ、母さんは父さんと仲いいの？」

シンジが突然そんなことを聞いてきたのでユイは飲みかけていたコーヒーを噴出しそうになった。

「えっ・・・なんでそんなこと聞いてきたの？」

「だって母さんあまり父さんと話してなかったし・・・」

このときシンジは心のなかで夫婦仲が悪かったり・・・いや、父さんの浮気かも・・・とか勝手な想像を膨らませていた。

しかし、実際のゲンドウは超がつくほどの愛妻家である・・・気持ち悪いくらいに。

ユイはそれをシンジに話した。

「私たちの夫婦関係はきわめて良好よ！超がつくくらい！！だけどあの人仕事場ではいつもあなのの。」

「えっ父さんっていつもああじゃないの!？」

シンジは叔父さんの家に来たときやNERVで会ったときのゲンドウのイメージしかなかった。

「そんなわけないじゃないの！いつも家ではメチャメチャ甘えてくるのよ。」

「あの父さんが!？」

シンジはしばらく考え込んでいたがやはり想像できなかったようだ。

「まあそのうち分かってくるわよ。もうすぐ付くわよ。」
はじめて帰ってくる我が家が見えてきていた。

碓家はコンフォート17というNERVの上級士官用宿舎にあった。

ユイの話では他に独身用の部屋にミサトやオペレーターズ、赤城親子など重要人物たちはみんなここに住んでいるらしい。

もちろんNERVの全力をあげた警備システムが施されている。さらには地下シェルターや屋上にはヘリポートまであって充実した環境である。

ゲンドウとユイの住まいは一番広い最上階にある部屋だった。

「おじやましま・・・」

そこまで言いかけたシンジをユイが押さえた。

「待ちなさいシンジ！今日からここに住むんだから・・・」

「ごめん・・・おかえりなさい！」

「ばか！ただいまでしょ！！」

「うん、ただいま。」

「おかえり、シンジ。」

めんどくさい漫才のようなやりとりを経て、彼らは部屋に入ってしまった。

室内はきつちりと片付けられていて、埃ひとつ無い部屋だった。

ユイの性格をよく表している。

「シンジの部屋はこっちよ。」

ユイによばれて行くと6畳ほどの部屋が用意されていた。

この家にはホームシアターなど他に6つの部屋があった。

「ただ広すぎてなんにも使わないのよね・・・」

とユイは言っている。

シンジが必要な家具について思案していると不意に腹が鳴った。

「それじゃ晩御飯でもつくろうか。シンジ、手伝って。」

シンジとユイはキッチンへ向かった。

晩飯にはハンバーグを作った。

焼いているときにゲンドウが帰宅してきた。

「おかえり、父さん。お疲れ様。」

「ああ、ただいま。」

ゲンドウの返事は素っ気無かった。

おそらく緊張してしまっているのだろうがユイがそこにツッコミをいれる。

「あなた、それだけはないでしょ・・・せめて『おお！？今日の飯はハンバーグか！？たのしみだな！』くらい言ってくれない

と・・・」

そこにシンジも便乗する。

「確かにそれくらいいいってくれないと。」

ゲンドウは初め、はずかしいだのくだらないだの喚いていたが観念した。

「おお！？今日の晩飯はハンバーグか！？たのしみだな！」

「シンジ？今の録画できていたわよね！？明日にでも冬月先生にでも見せちゃいましょうか！！」

「な！？それだけはやめてくれ、ユイ、シンジ！！」

普段からは想像できないくらいにゲンドウがうるばえはじめた。

「うそよ。まったくあなたはだまされやすい人ね・・・はやく着替えてきて。もうすぐできるわ。」

こうしてゲンドウが行ってしまったあとにシンジがユイに耳打ちした。

「母さん、大成功！いまパソコンに保存してるよ。」

シンジの手元にはキッチンの引き出しに巧妙に隠したパソコンに隠しカメラがつながれており、全記録を保存していた。

なお、この日からゲンドウがユイとシンジにからかわれ始めたのは言うまでもない。

NERV、入隊 参(後書き)

すいません。これから受験本気モードになるので更新遅れますが、
できるときにやっけていくのでこれからもどっか応援よろしくおねが
いします。

初めての、登校 壱

次の日、シンジは転校先の第三新東京市立第壱中学校、2 - A教室で自己紹介をしていた。

昨日のゲンドウ事件のあと、ユイが

「明日から学校よ。」

と言ってきたのが始まりだった。

なんでもシンジが眠っていた三日間で編入手続きや制服の入手、その他もろもろを全て終えていたらしい。

エヴァのパイロットということは基本的に伏せておくよう言われていた。

ただ、ばれてしまった場合には言ってもいいということになっていてこれはシンジが学校で孤立しないように・・・というユイの親心によるものだった。

「第二東京のほうから来ました碇シンジです。よろしくお願ひします。」

ごく普通の自己紹介をしているときにシンジはクラスメイト・・・主に女子・・・から妙な視線を感じていた。

父親から臆病な性格と高い身長だけしか受け継がなかったシンジは顔は基本的に美形のユイから受け継いでおり、自分での意識は無いが美少年の部類に入る少年だった。

さらにその臆病な性格がルックスと相乗効果をはたし、女性の母性本能をくすぐる男の子だった。

当然、クラスの女子から色目使いで見られるのだが鈍感なシンジは気づかない。

威嚇されているのかと思い、レイにも与えた極上の微笑をクラスにむけて放った。

クラスメイトはたちまち騒ぎ始めた。

女子なんかは今の微笑みについて、

「私に今のはきてたわ!」

「いや、絶対わたしをみてた!」

とくだらない論議をはじめたし、カメラを持ったメガネ少年は・

・

「うるる!売れる!やった!!!神よーーーー!!!」

・・・訳の分からん雄たけびをあげていた。

「じゃあ碇君は好きなのところに座ってください。」

担任の老教師が疎開で空席の目だつ教室をさしながら言った。

「碇君、こつちきてみない?」

「いやこつちもいいところよ。来ない?」

シンジをめぐって女子が欲望むき出しの争いを始めたがシンジはどっちに行っても危険ということを叔父の家の裏の山で鍛えた危機察知能力で感じ取り、

「いや、僕はここにするよ。」

と、隣に誰もいない教室の窓際にある席に腰掛けた。

やはり授業はつまらない。

担任の老教師の歴史の授業はいつもセカンドインパクトとか過去のゴジラの話になってしまう。

もちろん生徒は聞きなれたその話に耳を傾ける者などなく、シンジだけがその話を聞いていた。

「・・・そして1993年にゴジラを倒すために国連がG対策センターを設立してその下に特殊機関Gフォースが設立されました。これが今のNERVになったのです・・・」

この話ならしっている。

もちろんNERVは非公開組織であるが独自の軍事力、さらに先日使徒襲来などでその存在はかなり前から知られている。

G対策センターは世界を滅ぼしかねないゴジラと地球環境の変化により、姿を見せることの多くなった特殊生物に対応するために設立された国連直属の特務機関である。

対ゴジラ兵器の開発などを目的としてG対策センターの下にGフォースがあった。

しかし、実戦ではゴジラに対し、一度は追い詰めるもそれ以外になんらダメージをあたえることはできずに95年にはメカゴジラ、MOGERAを失い通常戦力しか持たないGフォースはメルトダウンの危険性のあるゴジラにたいして攻撃もできず、最終的にゴジラが溶けてGフォースは存在意義を失った

その後はメカゴジラやMOGERAなどのテクノロジの応用研究をおこなう人工進化研究所、自衛隊に組み込まれて対怪獣戦闘をおこなう特生自衛隊の2つの組織に二分された。

しかし、2000年、南極でおきたセカンドインパクトで混乱する世界の治安維持を目的として両組織は再び合併、国連直属の特務機関「ゲヒルン」となる。

セカンドインパクトのときに発見された裏死海文書の解読で2015年に襲来が予想される使徒に対抗するためにゲヒルンは決戦兵器、エヴァンゲリオンを開発。

そして対使徒特務機関「NERV」に改称し、現在に至っている。

この情報は昨日ユイに渡された極秘の文字のついた資料に書かれていたことである。

もちろん民間人には違う情報が発表されている。

公式にはセカンドインパクトは大質量隕石落下によるものとされている。

しかし、シンジが貰った資料にもセカンドインパクト発生原因は全く書かれておらずこの時点では

セカンドインパクトについてシンジは何も知らない。

さて、シンジが老教師の話に飽きたころ、パソコンにメールが来ていた。

読んでみると女子からのメールで「チャットしませんか？」と書いてあった。

シンジがチャットに移動すると早速質問された。

「碓君があロボットのパイロットってホント？」
いきなりばれていた。

シンジはばれてもいいといわれていたが不安になってこう返した。

「なんでそう思うの？」
3秒で返事。

「碓君があロボットのパイロットってホント？Y/N」

どうやら2択らしい・・・

あきらめたシンジはこう返した

「Y。正解。これ以上は守秘義務。」

その瞬間クラス中が大騒ぎになった。

次々と質問されているが、全てに

「ごめん。守秘義務なんだ。」

と答える。

本当は守秘義務なんてないが全ての質問に答えるのは大変だ。

全ての質問に対して答えられる方法としてシンジが考え付いたものだった。

授業が終わるまで質問は続いてたがシンジが守秘義務としか言わないのでみんなあきらめてその後は普通に過ごせた。

その日全ての授業が終わってシンジが帰ろうとしていると突然、

「おい！！転校生！！ちよつとこんかい！！！」

大声で呼び止められた・・・

振り向いてみるとジャージの少年とカメラ片手に立っているメガ

ネの少年が立っていた・・・

初めての、登校 巻（後書き）

なんかへんな文章になってしまいました。申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3813y/>

エヴァとゴジラとエースコンバットを混ぜてみた。

2011年11月20日02時11分発行